

日本IT書紀

049 拡大する矛盾

03 未剖篇
卷之六 游魚

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第四十九

拡大する矛盾

一

北川宗助が黒澤商店に入る前、まだ暁星中学の制服を着ていたときの話である。

辛亥革命（一九一二年）以来、中国大陸は安定を欠いていた。外交と諸条約の正当な継承者は北京を首都とする中華民国だが、武漢に本拠を置く中国国民党がソ連の支援を受けて勢力を増していた。

一九二七年四月時点でいうと。北京政府の代表は顧維鈞、広東政府は王兆銘である。両陣営は「政府」「党」を名乗っていたが、実態は軍閥の集合といつてよかった。伝統的な権威をまとった中央政権が消滅すると群雄割拠となるのは、前漢王朝から後漢王朝にいたる過渡期とよく似ている。

袁世凱に始まり段祺瑞まで、北京政府は統一的・組織的な運営を維持していたが、派閥（軍閥）争いが顕在化した。そこを突いて広東政府が軍事行動を起こそうとしていた。

両陣営にとって、ベルサイユ条約で日本が利権を有するこ

とになった山東半島が焦眉の的となった。

そのような状況を背景に、同年四月二十日に発足した田中儀一内閣は、山東省における邦人二万人の生命・財産の保護を優先することに方針を変更した。これを受けて六月一日、陸軍の歩兵第三十三旅団、さらに歩兵第八旅団の主力部隊が青島に上陸した。

このときは北京政府の蒋介石軍が王兆銘軍を撃退し、田中内閣は八月二十四日、山東半島からの撤兵を閣議決定した。邦人の生命財産を守る、という政府のミッションに適ったものだった。

国民政府・王兆銘軍は一九二八年四月、三度目の北伐を開始し、山東に再び戦火が及ぶ危険性が高まった。田中内閣は歩兵三個中隊、さらに第六師団を山東に上陸させた。

これが第二次山東出兵となる。

日本軍ははじめ、蒋介石軍を刺激することを避けていた。ところが五月三日、たまたま中国兵と日本軍警備兵との間に衝突が起こり、またたくうちに戦闘に拡大した。結果として日本軍は国民政府軍を駆逐し、六月に入つて新たに第三師団が上陸した。

他方、田中内閣は北京政府の張作霖に対して、満州に引き揚げるよう勧告し、張も合意した。ところがこれを由としない日本の関東軍は、張作霖を始末し、一気に国民政府

軍をも下して中国を軍の支配下に置こうと企てた。

六月四日、張作霖の乗った列車が奉天に近づいたとき、鉄道に仕掛けられていた爆弾が爆発した。軍が内閣の意向を無視して暴走を始めた第一歩だった。この知らせが内閣総理大臣・田中義一のもとにもたらされたのは、一九二八年六月四日の深夜だった。

田中は、

——関東軍か……。

と直感し、翌朝、ただちに調査を開始するよう指示を出した。

調査はしばしば陸軍の妨害にあったが、翌一九二九年七月、調査団は張作霖爆殺事件が関東軍によるものであると断定した。首謀者として河本大作という関東軍高級参謀（大佐）を特定もした。

ところが、陸軍は「統帥権」を盾にして抵抗した。

「皇軍にかかわる事項は天皇の大権に属する」

というのである。

このためにその処分は「停職」にとどまった。これが田中内閣の命取りとなった。だけでなく、明治以来の近代日本を台なしにするきっかけとなった。

大村益次郎や大山巖が目標としたのは、近代的国家——この場合、「帝国主義的」という形容詞が必要だが——に

おける近代的軍事力の整備だった。彼らは「神兵」を作ろうなどとは考えなかった。

天皇も実は同じように考えていた。

田中は宮中に呼び出され、

「処分が生ぬるいのではないか」

と叱責を受けた。

翌日、田中内閣は総辞職し、代わって組閣したのは民政党の浜口雄幸だった。浜口は第一次加藤高明内閣で蔵相、若槻内閣でも蔵相、のち内相を経験しており、政党政治の刷新、景気の回復に期待が寄せられた。この期待を受けて七月九日に発表されたのが「十大政綱」である。

十大政綱では、対華外交の刷新、軍縮の促進、財政の整理、金本位制への復帰などが掲げられていた。このうち、金本位制への復帰は、第二次世界大戦前の日本政府による経済政策に混乱をもたらしただけ以外、何ら成果をあげることができなかった。

実のところをいうと、十九世紀から二十世紀初頭まで、国際貿易はすべて金本位で行われていた。つまり、金の輸出入は民間の自由任されていた。各国の通貨価値を裏付けるのは、各国政府が保有する正貨、すなわち金の保有量だった。日本は国内産業が軌道に乗った一八九七年に金本位制に移行し、国際社会の一員となった。

ところが第一次世界大戦でヨーロッパ各国が金輸出を禁止し、一九一七年九月にアメリカも金輸出禁止に踏み切ったため、日本もこれに同調した。一九一九年末に日本政府が保有していた金は二十億円相当であつて、金本位制に復帰しても十分に耐えることができる力を保っていた。

関東大震災によつて円の対ドル相場が百円＝三十八ドルに急落した。このため、一九二〇年代に入つて政府保有の正貨は、日本銀行十億円、在外三億円の計十三億円まで減少していた。

だが、商社や紡績業は金本位制への復帰を強く要望した。また三井、住友、三菱、安田といった財閥は満州などへの資本輸出を拡大する目的で、一九二八年十月、金輸出の自由化の即時断行を要求した。

二

浜口内閣で財政を担当したのは井上準之助である。

東大を卒業して日銀に入り、イギリスに留学後、一九一三年に外国為替取引を専門とする横浜正金銀行の頭取に就任し、一九九年日銀総裁を経て山本権兵衛内閣、田中義一内閣で蔵相を務めた。

いかにも財政エリートの経歴を持つ彼は、長引く不況の

原因が成金時代に膨れ上がった不良債権とインフレにあることを見抜いていた。

加えて円の国際的な価値が下がった。

一九二九年七月二日、浜口内閣の蔵相に就くと、井上はすかさず緊縮財政を打ち出した。歳入ではシーリングを強化し、国債の新規発行を三千九百二十四万円減らし、一般会計当初予算十七億七千三百五十六万円の五・六七％に相当する九千六百五十五万円を削減した。彼には、軍備の縮小によつて、国債発行額の圧縮と一般会計予算の削減が達成できるであろう、という予測があつた。

事実、ロンドン海軍軍縮会議で若槻礼次郎全権は、補助艦を含む日本の海軍の装備を対英米の約七〇％とすることとで合意、条約に調印した。

その前に開かれたワシントン軍縮会議でイギリスとアメリカは、日本の軍備を自国に対して六〇％に抑制するよう強く主張していたから、若槻全権が獲得した対英米七割という数字は健闘といつてよかつた。軍部は一応の納得を示し、かつ浜口内閣にとっては軍事費を圧縮できるので一石二鳥に思われた。

次に彼は金保有高の確保・維持に手を打った。金融不安が起ころのは兌換性への不信が原因であつて、通貨の価値を裏付ける十分な金が確保できれば為替も落ち着くはずだ

った。そのためには円に対する信用保証を取り付け、金の国外流出に歯止めをかけなければならない。

—— 国際経済の安定を図るには日本との共同歩調が必要。と判断したアメリカ合衆国は二千五百万ドル、イギリスは五百万ポンドの信用保証枠を約束した。

第三段階はインフレを抑制することだった。

井上は金が経済に果たす「自然の自動調整作用」を信じた。金の保有量に依じて通貨の発行は制限され、おのずからインフレにブレーキがかかる。自然の自動調整作用が充分に働かない時は、日銀が公定歩合でコントロールする。すなわち金本位制の導入である。

政府の動きから内外の投資機関は

—— 日本の金解禁は間近。

と見て、投資をドルから円に切りかえた。

このために為替レートは円高に転じ、百円⇨四十三ドル五〇セントに回復した。これと同期して金の保有量が増加に転じ始めた。緊縮財政で一時的に不況の度は増すかもしれないが、輸出が回復すれば不況から脱することができる。アメリカ合衆国の経済は堅調であるかに見えた。

八月二十八日、浜口は「全国民に訴う」と題したチラシを作らせ、全国一千三百万戸に配布した。そこには次のようであった。

今日のままの不景気は底知れない不景気でありませぬ。これに反して、緊縮、節約、金解禁によるところの不景気は底のついた不景気であります。前途暗々たる光明を望んでの一時の不景気であります。我々は国民諸君とともにこの一時の苦痛をしのんで、後日の大なる発展をとげなければなりません。

経済界はこぞって浜口を歓迎した。

これに対して政友党の三土忠造は言った。

国民挙って消費を節約すれば、他人の生産したものを買うことが減少すると同時に、自分の生産したものの売れ行きも減少する。言い換えれば経済政策全体の縮小に終わる。浜口首相も井上蔵相も我が国の公債総額が六十億円近くに上ったことを以て、あたかも国家の存亡に関する一大事の如くに宣伝し、現内閣はこれを整理を以て重要使命とするものであると吹聴し、この六十億円を一人当たりに割ってみれば九十円の借金を負っている、誠に大変なことを告げた。

個人レベルの節約は消費の抑制につながる。だが、国を

あげて消費を節約するとはどういうことか——この批判は正論だった。

十一月二十一日、政府は「来年一月十一日から金輸出を自由化する」と発表した。経済の縮小を以て景気の回復をねらうというのである。

この日、株価は跳ね上がった。

金の解禁立て直し

来るか時節が手を取って

という「解禁節」までが流行した。

これを受けて浜口は、自信満々で衆議院を解散した。与党民政党は二百七十三議席を獲得した。対して反対を唱えた政友会は百七十四議席にとどまった。

国民は金解禁を支持したのである。

三

井上が描いた景気回復のシナリオは、次のようなものだった。

①まず、緊縮財政／軍備費削減によって重工業、繊維産業の不況は一時的に深刻さを増す。

②それによって、倒産や企業合併が進み、失業者も一時的に増加する。

③しかし企業が淘汰され、資本の集約が促される。

④並行して賃金の抑制と圧縮が進み、生産原価が低減する。

⑤結果として日本製品の国際競争力が増す。

しかし彼は、重大なことを見落としていた。

それは、世界規模のマネーサプライないしマネーフローである。

金本位制を導入するのが日本だけであれば、国際的な円の信用力は向上する。また国内金融機関への信頼感も高まり、海外からの投資（もしくは円買いに伴う外貨準備）と預貯金が増し、その資金が産業界に低利で還流すれば投資に弾みがつく。

彼はアメリカの経済状況の分析を怠った——というより、樂觀的であり過ぎた。その一か月前、ニューヨーク証券取引所で株価が大暴落していたのだが、彼はそれほど重大に受け取らなかつた。むしろ翌年一月にロンドンで開かれる海軍軍縮会議に大きな期待を抱いていた。

金解禁が実施されると、為替レートは百円＝四十九ドル八十五セントの固定制となり、円は一四％以上切り上げら

れることになった。金解禁が近いと見てドル売り・円買いの動きを強めていた国内外の投機筋は、一転して円売り・ドル買いの利食いに走った。円を持っていれば、持っているというだけで一四%もの損を被るのである。

このため一九三〇年一月から六月までの半年で、二億三千万円相当の正貨（純金）が海外に流失した。一九三〇年の一年間だけで三億円——日銀準備高の三割——相当の正貨が海外に流出し、なおその勢いを失っていないかった。

翌一九三一年九月二十一日、金本位制の「本家」であるイギリスが日本とは反対に

——金の輸出を禁止する。と発表した。

すると今度はポンドを売ってドルを買う動きが世界的に強まった。国内の財閥はドル売りによる差益に目が眩んだ。手持ちの円をドルに換え、海外の機関投資家に売った。

九月二十一日から十一月四日までのおよそ一か月半に、横浜正金銀行は三億円四千二百万円相当の円をドルに交換した。そのときの上位四行は次のようである。

ニューヨーク・ナショナル・シティ銀行 三千七百万\$
三井銀行 二千百三十五万\$
三井物産 一千四百二十三万\$

住友銀行 一千二百三十五万\$

だけでなく、日本企業の海外拠点へのドルが送金された。

十月 一億三千五百万\$

十一月 一億四千七百万\$

十二月 二千三百万\$

結果として、ポンド、ドルに対して円が切り上げられた。一九三一年十二月の時点で一ドルは二十八円十二セント、つまり二年間で約二倍に跳ね上がった。海外の品物が半値で輸入できるということは、日本からの輸出品は倍に値上がりすることを意味してる。

輸出に依存していた産業は、たちまち経営難に陥った。ここにアメリカ経済の混乱が追い討ちをかけた。

輸出は極端に低迷し、日本の主要産業は操業率の引き下げに追い込まれた。セメント・鉄鋼は五〇%台、肥料・晒粉は四〇%台、紡績・製紙は三〇%台にまで落ち込んだ。

生糸の単価指数は、八五・三から五九・七に、米価指数は二八・九二から一八・三六に暴落した。一九二九年に百三十九億四千百万円だったGNPは、一九三〇年に百十二億四千五百万円に、三二年には百六億七千八百万円に減少

し、株価指数は一〇四・五から七一・五、三一年は五三・〇まで落ちた。

企業の倒産とリストラだけは井上が予想した以上の効果あげた。民営工場労働人員指数は二九年は九一・一だった。それが三〇年は八二・二、三一年は七四・四と悪化した。実収賃金指数は二九年一〇三・九だったが、三〇年には九八・七、三一年九〇・七に低下した。

東京駅で浜口雄幸首相が狙撃されたのは、金解禁からわずか十か月あまり後の一九三〇年十一月十四日だった。犯人は、右翼団体愛国者の構成員佐郷屋留雄であつて、その背後には「一人一殺」を合言葉にした政治テロ組織・血盟団がうごめいていた。

一九三〇年）四月に鐘淵紡績は全従業員の給与を一律で四割カットすると発表し、ここに大争議が勃発した。九月には東洋モスリンが東京・亀戸工場の人員を大量に削減したこと大規模なストライキが発生した。十一月には富士紡績川崎工場の従業員が賃下げに反対してストライキを敢行した。

不況に強い職業であるはずの教員も、六百八十七町村で八千七百八十二人の給与が未払いとなり、都市部では仕事を失った人が全就労人口の五・三％に相当する約三十八万人、農漁村地域では欠食児童が二十万人に達する深刻な事

態となつていた。

われわれはガツガツと物を食べる人を見ると、

—— 欠食児童みたいだ。

などと言うことがある。

飢える、ということがない現在、この言葉はあくまでも冗談として使われる。だが当時の状況は悲惨だった。水を飲んで腹を満たし、木の根を煮て食するようないことも珍しくなかった。米の一粒が手に入らなかつたのだ。

本来であれば就労しているべき若年層ですら、郷里に帰つても仕事が無かつた。十年越しの不況から抜け出すため、企業経営者は経費を削減するために人員整理を進めるほかなかつた。展望を失つた「エログロ・ナンセンス」が流行し、まさに小津安二郎の映画『大学は出たけれど』の時代だつた。

一九三一年十二月に組閣した犬養毅は、金融恐慌を「モラトリアム」という裏技で切り抜けた高橋是清を蔵相に起用し、金輸出再禁止を即刻実施して事態の收拾を図つた。経済はやや回復に向かうものの、日銀の正貨準備高は三億円にまで減少していた。社会全体を覆う不透明感を打破するには力不足だつた。

~~~~~ 補注 ~~~~~

顧維鈞 Gu Weijun / ぐゐきん / 1888 ~ 1985。一九二四年中華民国代総理 (国務総理代行) 兼外交総長となり中ソ協定に調印してソ連との国交を樹立、併せて帝政ロシア時代の不平等条約撤廃に合意した。二六年十月海軍出身の杜錫珪 (Du Xigui / と・しゃくけい / 1874 ~ 1933) が総理を辞職したあと、代総理兼外交総長に就任した。

王兆銘 Wang Zhaoming / おう・ちようめい / 1883 ~ 1944。「孫文直系」を自認し、一九二五年七月一日、広州国民政府の主席となった。中国国民党と中国共産党の連携 (国共合作) で北京政府と対抗、大日本帝国の勢力排除を推進した。

袁世凱 Yuan Shikai / えん・せいがい / 1859 ~ 1916。初代中華民国大総統。北洋軍閥の総帥。大清帝国第2代内閣総理大臣を務めたが、清朝崩壊後は第二代中華民国臨時大総統、初代中華民国大総統に就任。一時期中華帝国帝政として復活し、その際に使用された元号より洪憲帝と呼ばれることもある。(Wikipedia)

段祺瑞 Duan Qirui / だん・きすい / 1865 ~ 1936。北洋軍閥の頭目の一人で、袁世凱の死後の部内対立で米英の支援を受ける直隸派に対抗して、大日本帝国に接近した (安徽派と呼ばれる)。一九一九年ベルサイユ条約をめぐる判断で下野、一九二〇年五月、直隸派との武力衝突に敗れて天津の日本租界に逃げ込んだ。その後も張作霖などと連携して復権を図ったが叶わなかった。

北洋軍閥 清帝国末に起こった太平天国の反乱を鎮圧するために

李鴻章 (Li Hongzhang / り・こうしょう / 1823 ~ 1901) が結成した「淮軍」を母体に拡大し、北京政府を樹立した。

蔣介石 Jiang Jieshi / しょう・かいせき / 1887 ~ 1975。中華民国 (台湾) では「蔣中正」の名で知られる。一九二六年から一九二八年まで北京政府・北洋軍閥を排除する「北伐」の指揮をとった。第三代・第五代国民政府主席、初代中華民国総統、中国国民党永久総裁。国民革命軍・中華民国国軍における最終階級は特級上將 (大元帥に相当)。

張作霖 Zhang Zuolin / ちよう・くわくりん / 1875 ~ 1928。中国東北部の遼寧省に生まれ、長じて馬賊の首領となり辛亥革命で奉天警備を担当した。一九一一年中華民国軍中將・第二十七師長となり、一六年に奉天將軍・段芝貴 (Duan Zhigui / 1869 ~ 1925) を失脚させて奉天督軍兼省長に就任し奉天軍閥を形成した。

一九二〇年中央政界に進出し、反共産主義の旗色を鮮明にした。二六年北京に入って安国軍総司令、二七年陸海軍大元帥となり北京政府を支配したが、大日本帝国陸軍関東軍との関係を調整できず、北京から奉天に向かう列車が爆破され死去した。

河本大作 こうもと・だいさく / 1883 ~ 1953。兵庫県に生まれ、一九〇三年陸軍士官学校、のち陸軍大学校卒。歩兵第三十八連隊、中支那派遣隊司令官、参謀本部、二一年北京公使館付武官補佐官などを経て二六年大佐、二八年張作霖爆殺事件の責任を取って退役。以下、本編。四九年戦犯として逮捕され、五五年太原戦犯管理所で病死した。

浜口雄幸 はまぐち・おさち / 1870 ~ 1931。高知県生まれで一八九五年東京帝国大学から大蔵省に入った。一九〇七年煙

草専売局長官を経て第三次桂太郎内閣で通信省次官、第二次大隈重信内閣で大蔵省次官に抜擢されたのを機に憲政会に入った。一五年衆院議員となり、二四年加藤高明内閣で蔵相、二七年民政党総裁。三〇年十一月十四日、東京駅構内で狙撃され重傷を負い、これが原因となって首相を辞任した。狙撃事件の現場を標した石標がいまも東京駅に残されている。

井上準之助 いのうえ・じゅんのすけ／1869～1932。大分県に生まれ東京帝国大学から日本銀行に入った。金解禁を実施したあと一九三一年に蔵相を辞任し民政党総務に就いた。

水士忠造 みつち・ちゅうぞう／1871～1948。讃岐国大内郡出身の衆議院議員。「三王」は婿養子先の姓で、実家は「宮脇」といった。内閣書記官長、文部大臣・大蔵大臣、通信大臣、鉄道大臣、枢密顧問官、内務大臣(一時運輸大臣も兼務)を歴任した。景気が低迷しているとき大型の財政投融资を行うべきであるとする水戸の批判は、のちの経済理論からすれば正しかった。

民営工場労働人員指数 民間企業における工場労働者の定員に對して実際の仕事に就いている人員の比率を景況指標とする方法。第二次大戦前、工業分野の景気動向を測る手法とされた。

血盟団 井上日召、海軍中尉古河清志を中心に一九三二年一月に結成された右翼政治結社で、「国家革新」を合言葉に「一人一殺」による要人暗殺を実行に移した。

井上日召 いのうえ・にっしょう／1886～1967。実名は「井上昭」いのうえ・あきら。群馬県に生まれ、三菱造船の臨時工や代用教員をしていたが、一九一〇年満州に渡って右翼的に傾斜した。二二年帰国し水戸市郊外の護国堂で「悟りを開いた」として自ら出家し「日象」と号した(正式に出家したことはない)。

のち本名の「昭」にちなんで「象」を「召」に改め、このうち血盟団を結成することになる。三二年三月に自首し、三四年無期懲役の判決を受けたが四〇年十一月に出獄、近衛文麿の屋敷の庭で暮らしていた。一九六七年に八十一歳で没するまで、右翼の大物として隠然たる力を持っていた。

映画『**大学は出たけれど**』 監督…小津安二郎、出演は高田稔、田中絹代、鈴木歌子などだった。

日本IT書紀 049 拡大する矛盾

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。